
夢物語～水溜り～

ネコなの。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢物語〜水溜り〜

【Nコード】

N7090P

【作者名】

ネコなの。

【あらすじ】

都市伝説。

雨上がりの学校、その敷地内にあるであろう水溜りに自分の血液を垂らすと、水溜りの中に世界が広がる。

そんな都市伝説を、実行に移そうとする天文部。

水溜りの中には、どのような世界があるのだろうか。

プロローグ（前書き）

初投稿です。

よろしければ、感想、評価等よろしくお願いします。

プロローグ

誰か、殺して。

お願い、誰でも良い、殺して。

この愚か者を、殺して。

殺して。こんな道化を殺して。

今更引き返すことなどできない、誰か、止めて。

彼女は切に願う。

世界の裏側で、願っている。

彼女は、死にたがりの道化だ。

『天文部』

女子特有の丸みを帯びた文字で書かれた部室のプレートを見て、
俺、かんざされい神崎麗は毎度のことながら頭を抱えているのだった。そのプレートは、オレンジ色のプラスチックをわざわざ加工して作ったのだが、オレンジと言うだけでも奇抜なのに、それに加えて女子特有の丸文字の見易さを相殺させるが如く、その文字は黄色かった。このプレートの作成風景を見ていない一般生徒が一瞥しただけでは文字が読めない所か、視力低下を促すだろう。別にそれを目的としたわけではないのだがそう思われても仕方がない。文句があるのなら俺ではなくこの天文部の部長に申し出てほしい。そんなことを廊下に突っ立って考えていても無意味だと思い、天文部のドアノブを捻り入室した。

「どもー」

部室は暖房が点いており、廊下とは比べ物にならないくらい暖かい。
いつも通り先客が一人居たので軽く挨拶をして、よくある長テ-

ブルに収納してあるパイプ椅子を引き出してそれに腰掛けた。天文部の部室は典型的な文芸部の部室と同じつくりをしている。カーテンが開け放たれた三階の窓の外には学校の中庭が見下ろせる。昨日の豪雨など微塵も感じさせない蒼穹が窓の外には広がっていた。

あ、誰か転んだ。まあ、その他にも友達とワイワイ弁当を食べている女子生徒の姿なんかもあって、みんな平和そうだ。そう、今は昼休み。学校生活の中で（俺的に）一番有意義な時間帯。

「やつ」と、軽く木製の箸（割り箸とも言う）を持った右手を上げて榎戸久真季が挨拶を返してきた。まず最初に目に入ってくるのは誰もが納得すること間違いなしの端麗な顔立ちだろう。どこかのお嬢様を連想させる真季の気品に満ちた顔。それに控えめな茶髪の長髪はよく似合う。お嬢様然な顔立ちなのに挨拶が「やつ」と気さくなのがまた良いのかもしれない。実際真季は特別にお嬢様と言うわけではないらしいし。

今更お嬢様キャラで「御機嫌よう」なんて言われたくもない。

「弁当一緒に食べてもいいかな？」

と、答えは分かっているが一応了承を得ておく。

「うん、肉類が入っていないヘルシーな、お弁当なら全然OK！」

「もちろん。パンと野菜サラダだから安心してくれ」

さつき購買で買ってきたフランスパンの袋を開けながら、応答する。

「にしても、マキは相変わらず野菜ばかりだな」

俺のちょうど向かい側に座って、せつせとレタスやらブロッコリーを可愛らしい小さな口に運んでいる真季の弁当の中身を覗いてみる。すると、その弁当の中身は新緑の木々が生い茂り、さながら森のようだった。所々に赤や黄色の野菜たちが散りばめられており、一切肉は入っていない。卵関連の料理も入っておらず完全な野菜王国を築き上げていた。パクパクモグモグ真季が租借するたびに、森の木々はなくなっていく。野菜の国の女王様のような野菜の食べっぷりだ。女王様がどんなお方かは分からないけれど。もしも女王様

も野菜なのだとしたら共食いになってしまふ。

ともあれ、何故真季が野菜オンリーの極限ヘルシー弁当を食しているのかと言うと、本人曰く、別に野菜が大好きなわけでも、ダイエツト中なわけでもなく、動物が好き過ぎてあらゆる動物の肉を食べべれないらしい。他人が美味しそうに動物の肉を調理して食べているのを見ると自分でも驚くほど腹が立つのだそうだ。酷い時には殺意が沸いてくると言うのだから恐ろしい限りだった。

「なあ、マキ」

フランスパンを噛み千切りながら、俺は徐々に滅んでゆく野菜王国を感慨なしに見つめる。

「ん？ どしたのレイ」

「名前で呼ぶなつての……」

「いいじゃん、カワイイし」

悪びれる様子もなく、からかう訳でもなく本当にカワイイと思っているようで、少し苛立つ。まあ、俺としては『麗』なんて言う女のような名前は大嫌いなのだが。

両親には申し訳ないけど、男にこの名前はセンスを疑わざるを得ない。いや、マジで。

フランスパンを食べ終わり、今度は野菜サラダに取り掛かる。

「変な夢見たんだ」

呼び方についてはそれ以上触れず、俺は話を再開する。

「夢？ どんな？」

真季が野菜王国滅亡の魔の手を休め、聞き手に転じる。

「そうだな、ちょうどこんな感じで夢の中でもマキと部室で昼食べてるときに、こう、凄い勢いで部室のドアが開け放たれて、アム先輩が飛び込んでくる。みたいな夢を見た」

「いつもの風景じゃん」

「言われてみれば確かに。でも、そんなにリアルティ溢れる夢は今まで一度も見たことがなかったんだけどな」

「うーん、レイが忘れてるって可能性もあるじゃん？ 前にもそ

ういう夢を実は見たことがあるんだけど朝起きたら忘れてた！　みたいなの」

野菜サラダに一つだけ、ちょこんと乗っかっていた真っ赤なトマトと、真季の言葉も一緒に咀嚼してから、俺はそれに納得した。

「マキは見たことあるか？　現実で起きてもおかしくないようなリアリティに溢れた夢」

「うん、私も覚えてるので一個だけあるんだ、聞きたい？」

いかにも聞いてほしそうな瞳と表情で、俺に迫る真季。なんか怖い。

「お、おう。一応聞かせてくれ」

少したじろぎながらも、俺は話を促す。

「それがねー、私もレイとシチュエーションは一緒に、こうやってお昼を食べてるときだったんだけど、チラッとレイのお弁当の中を覗いたら、中にはなんと私を挑発しているとしか思えない、肉尽くしのメニューがギッシリ詰まってて相当ムカついたっていう夢」

「おい、それ絶対今もムカついてるだろ！？　そうでなきゃそんな分かり易い怒りのこもった口調にはならねえ！」

「大丈夫、夢の中でぶっ叩いておいたから」

現実で被害に会わなかっただけマシか……。

「良かったな、それが正夢じゃなくて。マキにとっても、俺にとっても、本当に良かった」

俺は、心の底からしか出せない、切実な思いがはち切れんばかりに詰まった言葉を語る。

「うん、全くだよー、金属バットで思いっきり二、三発殴ったから現実だったら多分死んでただろうし」

「シャレになんねえから、それ！」

真季ならばそれを現実でもやりかねない。そのくらい動物が好きだってことなんだろうけど。

と、そんな恐ろしい夢を見たことを明かされ、真季の怖さを再認識したところで、俺の夢が今まさに正夢へと変貌した。

「みんな、重大発表があるわ！」

勢いよく開け放たれたドアから登場をしたのは、天文部部长。漣^{なみあむ}亜無^{さふ}。勝気で強い意思が籠った碧眼に、肩が隠れる程度の青みがかった黒いショートヘア。小柄な体格で、俺と頭一個分くらい身長差がある。一応、俺や真季より一学年上の二年生だ。

「わお、正夢じゃん」

「確かにいつも通りの光景だな。変な夢でもなんでもなかった」

「なに話してるのよ」

「いや、別に。んで、重大発表ってなんですか？」

俺の発言に、亜無は一瞬不機嫌な顔になったが、それは一瞬で、いつもの何か期待に満ちた表情を形作る。

「フフ、今日の放課後、あたしたち天文部は新世界を覗くのよ！」
またわけの分からないことを……。

亜無は高らかにそう宣言して、俺から視線をハズし、部室を見渡す。

「あれ？ みんな居ると思ったのに、レイとマキしかいないじゃない」

「今さらそれ言うならちゃんと周り見てから言って下さい」

俺がそんな正論を述べていると、真季がテーブルに少し乗り上げて、麗の耳元で呟く。

「へへ、だって部長、レイのことしか見てないもん。ま、私から見てそう見えるっただけだね」

耳元でこによこによと、そんなことを言われると、真季の吐息を間近で感じてくすぐりたい。

「ん？ それはアムに命を狙われてるから気をつけろって事か？」

「んゝおいしい！」

「そこ！ イチャイチャするな！」

「してませんから！」

俺が全力で亜無先輩に抗議している姿を見て、真季は一人クスクスと笑っていやがる。

「とにかく、詳しいことはまた放課後の部活で話すから、早く教室戻りなさいよ」

亜無先輩は、そう言い残すと、俺と真季を残して退室した。

「なんで今笑ったんだよ、フオローぐらいしてほしいんだけど？」
そんな感じで呆れていると、真季がまたクスクスと笑い始めた。

「だって、レイ顔真っ赤だったんだもん」

「うるせー」

イスから立ち上がり、窓を開けて中庭を見下ろす。

俺の力ない反論は、生徒が一人も居なくなった中庭の静寂に吸い込まれていったようだった。

部室の青い壁掛け時計の針は、昼休み終了三分前を示していた。

プロローグ（後書き）

ペースは遅いですが地道に更新していく予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7090p/>

夢物語～水溜り～

2010年12月31日03時24分発行